

令和元年度外部評価結果

外部評価委員会健康・栄養研究分科会
令和2年4月23日（木）実施

凡例

斜字体 最高点

下線有り 最低点

令和元年度 外部評価委員会 委員コメント

所長付		栄養疫学・食育研究部	
評点	コメント	評点	コメント
2.0	フレイルの観点は注目されるが、摂津介入に関しては、客観的な評価項目を中心にクリティカルに検討し、妥当性のある介入方法を模索してほしい。 亀岡研究はぜひ長期観察結果が得られる体制構築が望まれる。	3.0	有効に2012国民健康栄養調査結果を抽出して興味深い結果が得られている。 食育に関する活動に関してさらなる検討が望まれる。
5.0		5.0	
4.0	介護予防プログラムのフレイル予防効果についてタイムリーにとらえて明らかにできた点が優れている。令和2年度からフレイル研究が身体活動研究部に移管されるとのことであるが、引き続き充実した研究が望まれる。特に長期予後に留意されたい。 高齢者におけるFFQの評価研究は意義が深い。 情報発信の役割が所長直轄になった。活動が期待される。	5.0	負担の多い法定業務を着実に遂行している点が高く評価される。特に、オンライン調査について検討が行われ、調査の質の向上に貢献できた。定額業務の中から研究テーマを見出し、バランスのよい取り組みが行われている。 食品成分表の改定が栄養分析に及ぼす影響は、着眼点が良い。 大変情報量の多い2012年の国民健康栄養調査の解析がさらに充実してきている。 食育については、都道府県食育計画のページへの貢献や、地域の貧困負荷を食事の質で克服可能であるという研究など、徐々に実績が積み上げられている。
5.0	介護予防プログラムの効果検証やフレイルに着目した健康格差解消のためのプロジェクトなど、所長主導で社会のニーズに沿って、迅速に取組が行われている。亀岡スタディについては困難な面もあるが前向きに取り組まれている点が評価できる。外部への発信についても携帯端末での閲覧に向けて時宜を得た取組が行われている。	5.0	国民の食による健康維持に関して継続的に基盤的な取組が着実に進められているだけでなく、国民健康・栄養調査結果の引用論文数も多く、学術的にも大きな貢献をしている。また、国民健康・栄養調査をより効率的に実施できるよう、デジタル入力サイトの操作マニュアル（動画含む）も作成されたことは高く評価できる。子ども食堂への認識調査結果等は、「生活様式を変える」社会の中でも生かされることから、今後、食育のあり方の提案に繋がっていくことを期待する。
4.0	・研究所の活動や研究成果等の発信が行われているが、携帯機器での情報発信も加わり、外部からの情報の取り込みが行いやすくなったことは評価できる。 ・セキュリティの確保は重要になるので、引き続き慎重に行ってほしい。 ・高齢者のフレイルに関する取り組みに期待する。	4.0	・国民健康・栄養調査より多くの分析が行われており評価できる。現在の食生活や健康状態の変化など、分かりやすい情報発信も行ってほしい。 ・子ども食堂の主体は民間であるが、子どもの栄養管理は重要なことから、今後も調査・研究、情報発信を行い、行政に繋がることを期待する。
4.0	健康長寿研究室研究室 エネルギー代謝だけに限らず、加えて亀岡プロジェクト等が順調に進んでいる点が評価できる。 但し、得られた成果が本研究所独自の発信になっていないのが残念。 研究連携室 研究所内の連携は別にして、研究所外との連携では栄養学研究の中心としての働きかけが弱いのが残念。もっと主体的な働きかけが出来ないものか。	4.0	国民健康・栄養調査研究室 国の政策での国民健康・栄養調査を順調に進めている。しかし、国民・栄養調査にも問題があり、その問題点を自ら明らかにし、積極的に改善していく姿勢が見られない点は改善を望む。 食育研究室 食育がなぜ必要なのか、積極的に明らかにしようとしている点が評価できる。しかし、なぜ食育が必要かが明らかになっていない中で研究を進めているのは残念。
4.0	・高齢者の食物摂取頻度調査の過小評価を校正する公式を開発できたことは画期的である。 ・情報発信に関しては、HPのスマホタブレット等携帯機器に対応するようにしていることが評価される。 ・所長直轄の意義は、各部署を超越した役割を果たすことと考えられる。研究所外及び研究所内部署間の連携と外部への情報発信を統括することをしっかり行ってもらいたい。	5.0	・国民健康・栄養調査において所得格差による生活習慣状況の違いの解析を深化させている。健康の社会的決定要因（SDH）について検討を国民調査において深める試みとして高く評価できる。 ・ホームページの充実に努めている。 ・多目的コホート研究により、食事の質が低い群では居住地の貧困度が高くなるにつれて死亡率が高くなるが、食事の質が高い群では居住地の貧困度にかかわらず死亡率が低いことから、食事の質を高めることで居住地の貧困に起因する死亡のリスクを抑制できる可能性を示唆したことは意義深い。
4.0	・健診にフレイルを加え、若い世代を組み込んだ点は評価できる ・フレイルや介護予防の介入研究は各所で行われており、その中において、この研究が十分に個性的なものと言えるのか考えさせられた。 ・健栄研に期待するのは酷なのかもしれないが、特定健診は10年を経て最大の課題は受診率の向上。未受診者対策を意識した研究になると素晴らしいと思う。	4.0	・国民健康栄養調査を実施する中での調査の改善は評価できる。 ・子ども食堂の調査で、孤食対策としての重要性を明らかにした点など価値ある調査だと考える。 ・さらに社会に訴えかける問題提起を期待したい。 (例) 栄養の改善においては、個人や家庭では限界があり、地域(面)で取り組むという視点の重要性が提起されている(例・イギリスのパンの減塩、足立区の野菜摂取等)。もし、可能ならそうした視点も重要かと思う。
4.0		4.4	

令和元年度 外部評価委員会 委員コメント

身体活動研究部		栄養・代謝研究部	
評点	コメント	評点	コメント
3.0	ウェアラブルデバイスの精度管理に関する検討は極めて重要なものである。 体力と疾患発症の検討はやや単発的な感があり、メッセージ性に欠けるように思える。 フレイルとの関連での継続的なテーマが選択されることが望まれる。	4.0	エネルギー必要量の算定は極めて困難なテーマであり、長期のアウトカムの調査が必要であり、その成果がまだ見られない。今後の活動に期待したい。
4.0		4.0	
4.0	運動ガイドライン研究室では、身体機能と疾患との関連の成果が出ている。レジスタンス筋における運動強度については、行動整理研究室から成果が出ている。運動強度については引き続き積極的に取り組むことが望まれる。 ウェアラブルデバイスの信頼性についての研究が注目される。 シナジー研究としての腸内細菌研究に関しては、生活習慣を視野に入れて持ち味を生かしてほしい。 令和2年度には健康長寿研究を部として取り組むそうであるが、身体活動に関する継続的な研究についても、引き続き鋭意取り組んでいただきたい。	4.0	二重標識水法によるエネルギー消費量研究は、健栄研ならではの根幹的な研究の一つなので、しっかり続けていただきたい。エネルギー消費量の研究が食事摂取基準に反映されるのであるから、きわめて重要である。 高齢者の活動量に関する研究で努力が続けられている。 栄養ガイドライン研究室も、設置部の変遷を経ているが、一貫してガイドライン提供のための貴重な知見を生み出しているの、引き続きの活動を切望する。
5.0	今後、在宅勤務の増加や集団スポーツの機会減少が見込まれる中、食と身体活動は、人の生活でますます重要なポイントとなる。ウェアラブルデバイスの機種間差の検討は、本研究所でのみしか実施できない独創性が高くかつ時宜に適った取組である。世界標準化のための指標設定など、日本がリードできる方向に発展することを期待する。 医薬基盤研との（腸内細菌）シナジー研究については、今期中長期研究計画との関連性が解りづらいので、次期中長期計画にどのように繋げていくのかを明示していただくか、所長直轄課題等として研究所でまとめて報告された方が「すわり」がいいように思える。	5.0	本研究所ならではの二重標識水法を活用した基盤的研究が着実に進められている。また、エネルギー消費量のウェアラブルデバイスによる簡易推定の妥当性について評価を行うなど、社会で活用される研究データの蓄積が行われている。介護予防については、フレイルの予防等に向け、身体活動レベルに適したエネルギー消費量の推定について順調に研究が進捗している。
5.0	・運動の感情的態度が、1年後の運動行動を直接予測する要因であることを明らかにしたことは、興味深い。 ・腸内細菌叢の調査研究は食事や栄養素等だけでなく、運動行動・食行動と腸内細菌との関連も示され、今後の解析結果に期待する。	4.0	・自立した生活をしている高齢者だけでなく、要支援レベルの高齢者や糖尿病、COPD等の有疾患患者など幅広い対象者についての身体活動レベルや総エネルギー消費量の推定法の検討は、現場での活用にも役立つと思われる、評価できる。
4.0	運動ガイドライン研究室 運動の必要性を明らかにするため多様な研究を行い、成果を出している。しかし、主体となる研究が見え難いのは改善点か。 行動生理研究室 共同研究で多彩な研究を行い、腸内細菌等の関連性を明らかにしようとしているのは評価できるが、同時に腸内細菌だけに関連性を求めているのは改善点である。	4.0	エネルギー代謝研究室 エネルギー代謝量について確実にデータを蓄積している。一日も早く国内外から認められるデータになることを望む。 栄養ガイドライン研究室 ガイドラインで栄養必要量について重要なデータを集めている。ガイドラインの実質的な研究の主体となることを望む。
4.0	・身体活動ガイドライン改定へ向けた研究室の活動が見えない。特に今回は、sedentaryや3メッツ以下の活動についてのレビューは行われているのか。 ・身体活動・体力（健康）についての社会的決定要因（SDH）に関する研究が必要ではないか。 ・今後の研究であるが、腸内細菌叢と身体活動・運動との関連性について明らかにしていただきたい。	5.0	・フレイル予防のためのエネルギー必要量の決定に関する研究は、時宜を得た研究である。 ・従来の活動量計では、高齢者の身体活動量を過小評価することが明らかになり、今後は高齢者の活動量を正しく推定できる加速度計の開発が求められる。 ・ALS患者の体重減少は予後や機能を悪化させることから、十分なエネルギー補給を行うためのエネルギー必要量の検討を行うことは意義があると思われる。 ・コンスタントにしっかりと業績を上げている点を評価したい。
4.0	・糖尿病、緑内障、高血圧、野球観戦…研究アイデアには興味を引かれた。 ・ウェアラブルデバイスの精度評価は、健康関心層の利用者も多く、国立の研究機関としてふさわしい研究内容で評価できる。 ・腸内細菌層研究の今後を注視していきたい。	4.0	・糖尿病患者のエネルギー必要量などガイドラインの診療の基本になるデータ収集の実績は評価できる。 ・健栄らしいセクションと理解した。 ・有疾病者のエネルギー必要量の研究など着実な成果を願う。
4.1		4.3	

令和元年度 外部評価委員会 委員コメント

臨床栄養研究部		食品保健機能研究部	
評点	コメント	評点	コメント
2.0	時間栄養学からの基礎的実験は面白い。現代社会の問題に対して、新しい臨床応用が期待される。	4.0	研究所としてなされるべき定期的な調査、データ蓄積活動であると評価される。更新されるデータベースは、貴重である。
3.0		4.0	
5.0	全体的に、高い業績が上がっている。 体型や脂肪肝と腸内細菌の関連の研究成果が上がっている。ヒトに関する臨床研究と、Kremezinの役割などのマウスの実験結果を融合して考察できるようなプラットフォームが望まれる。 糖代謝に関する中枢性のシグナルの研究がマウスで進んでいる。 睡眠と糖代謝に関する研究テーマも、画期的な分野と思われるので、積極的に推進していただきたい。	5.0	法定業務を着実にこなし、そこから研究テーマを拾い研究成果を上げることが、安定的に継続されている。 健康食品の肝機能影響に関する研究が継続的に有意義な成果を出していることが注目される。 情報サイトに関するヒット分析やニード調査などが継続してきちんと行われている。 健康食品と薬物代謝に関するシナジー研究の今後が期待される。
5.0	腸内細菌叢と健康状態の関連を明らかにするための研究が順調に進捗している。摂食調節や糖代謝、インスリン感受性調節に関わる遺伝子群を明らかにし、過栄養によるインスリン抵抗性誘導のメカニズム解明に向けて動物での研究が順調に進捗している。	5.0	健康増進法、食品表示法に関する成分含量の調査、分析法の開発、制度管理、健康に影響を与える食品成分の安全性・有効性評価研究と情報収集・提供等、多岐にわたる業務が、基盤的な研究と一緒にバランスよく進められている。
5.0	・肥満や糖尿病など生活習慣病のメカニズムに関する研究は意義が大きい。 ・糖尿病患者やシフトワーカーに関する時間栄養学的研究は始まったばかりであるが、結果が待たれる。今後の研究に期待する。	5.0	・許可試験、買上調査、外部精度管理、分析方法の標準化・改良、安全性評価系の開発に関する研究など、多くの研究が行われ、成果を上げていることは、今後も継続してほしい。 ・健康食品は一般の人が使用することも多いので、分かりやすい情報提供にも、期待する。
5.0	両研究室とも肥満、糖尿病などの生活習慣病の発症にかかわる栄養素の役割について分子レベルにまで掘り下げ研究を推進している。 業績も十分である。 表面的な成果を求める声も多くあると思うが、本研究所はこうした研究部の研究を主体にして発展していくべきと思う。	4.0	本研究部は食品の安全性に関し、国の業務を担っている部署であるが、その業務を過不足なく行い、また、その情報をネットを通して国民に伝えている。このネット情報は利用率も高く、貢献度も高い。 できれば国内外の問題のあった過去のデータを整理したサイトを立ち上げ再発の防止に努めてほしい。
5.0	・NAFLDとAllisonellaとの相関関係を明らかにしたことは意義深い。 ・AST-120の脂肪肝抑制効果を確認できたことも良い。 ・睡眠、食事、身体活動を環境要因として括っているが、これらは、生活習慣であり行動要因のカテゴリーに入るのではないか。	4.0	・多くの業務をしっかりと行っていることを評価したい。 ・緑茶カテキン成分の安全性有効性確認実験の結果としてエストロゲン欠乏に由来する骨密度低下の抑制効果が認められたことは大変興味深かった。 ・女性ホルモン様サプリメント利用者の調査で16%が体調不良を経験しているという結果は健康被害を意味しているのか。 ・健康サポート薬局における管理栄養士・栄養士の活動の場を広げることが必要。
5.0	・国民一般の立場からは、やせメタボなど臨床応用を期待するが、それに照準を合わせた着実な研究について評価する。 ・睡眠について国民の関心は高く、シフトワーカーの健康管理について、時間栄養学の研究成果に期待する。	5.0	・健康食品の安全性情報など国民にとって必要な情報を、ホームページで的確に発信している点が評価できる。 ・関係機関との情報交換や、ネット情報などに機敏に反応して、引き続き国民の健康に資する科学的な情報を提供していただきたい。
4.4		4.5	

令和元年度 外部評価委員会 委員コメント

国際栄養情報センター	
評点	コメント
4.0	<p>国際保健統計への貢献は評価される。</p> <p>また、災害栄養の実態調査エビデンス構築は重要な課題であり今後発展が期待される。</p>
5.0	
5.0	<p>国際招へいの実績の向上が著しい。国際協力が安定的に継続されている。WHO協力センターの活動が着実に続けられている。</p> <p>健康寿命延伸のためのシミュレーション、NCD大規模データの解析等、優れた研究実績が上がっている。</p> <p>災害栄養に関しては、リアルタイムのコロナ対応など、研究も実践も十分な活動となっている。</p> <p>幅の広い所掌で運営に苦労は多かったことが想像されるが、年々活動が充実してきて、評価も上がってきていると考える。</p>
5.0	<p>「国際」に関する業務に幅広く対応され、海外からの研究者の受入や人災育成のためのセミナー開催に加え、災害時の栄養情報提供ツール開発、災害食の宇宙食への展開、栄養政策に資する医療経済学的アプローチの試みのほか、研究論文も多数発表され、精力的に業務が実施されている。</p>
4.0	<ul style="list-style-type: none"> ・災害時の栄養摂取量等の分析は、貴重なデータであり、情報発信が行われており評価できる。 ・また、災害食と宇宙食との類似点に着目したプロジェクトは、興味深く今後の成果に期待する。
3.0	<p>数多くの諸外国の栄養問題に対応し、WHO教育センターとして調査、技術支援などもを行っている。</p> <p>毎年も感じていることであるが、あまりにも幅が広すぎるためか、あるいは対応している人が少ないためか不明だが、軸がどこに置かれているか分からないのが残念である。散漫な印象を受ける。</p>
4.0	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広く国際協力及び研究活動を行い、業績をあげており評価できる。 ・WHO研究協力センター活動の中で、身体活動にかかわる部分での活動がよく見えてこない。身体活動研究部とのコラボレーションをもっと積極的に行う必要がある。
4.0	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広い分野の業務に取り組み、一定の成果を上げていることは評価できる。 ・新型コロナのページを拝見したが、災害栄養という専門領域を生かした、健栄研国際セクションならではの社会への情報発信を期待したい。
4.3	

令和元年度国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所
外部評価委員会健康・栄養研究分科会 委員名簿

氏名	所属機関名及び職名
伊藤 裕	学校法人慶應義塾 慶應義塾大学医学部医学部腎臓内分泌代謝内科 教授
逢坂 哲彌	学校法人早稲田大学 早稲田大学ナノ・ライフ創新研究機構 名誉機構長 特任研究教授
加藤 則子	学校法人十文字学園 十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科 教授
亀山 眞由美	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構食品研究部門 部門長
川島 由起子	公立大学法人 長野県立大学 健康発達学部 食健康学科 教授
近藤 和雄	元学校法人東洋大学 東洋大学食環境科学部健康栄養学科 教授
下光 輝一	公益財団法人健康・体力づくり事業財団 理事長
渡辺 勝敏	株式会社読売新聞東京本社メディア局 専門委員

※敬称略、五十音順

任期:委員の委嘱承認の日から令和3年3月31日(2年)